末黒野

すぐろの

末黒野
平成二十七年一月五日発行　第七十巻第一号（通巻八二一号）

1月号（通巻821号）

蔵の街

小川玉泉

島と波彩り秋の大花火

行く秋の日差しを求め秋の蝶

ひと枝の小菊の白を亡き妻へ

夕空の茜を捉へ富有柿

新米に副ふる大とろ敬老日

訝るや散りし木犀また咲きぬ

青空や鈴振るさまに樗の実

平城の本丸御殿秋深む

氷川社の朱の大鳥居檀の実

秋雨に梲洗はれ蔵の街

身に入むや小江戸の昼の鐘鳴らず

舟運の絶えし小江戸や柳散る

湖の国の秋

松本三千夫

湖国七句

醒井は梅花藻の里秋を咲き

面差しは女人露けき観世音

湖展く桜もみぢの並木果て

竹生島

石段は百六十五島紅葉づ

義仲寺

木曽塚に控へ露けし巴塚

幻住庵

秋陰や芭蕉自炊の水今も

三井の鐘撞くや秋陰俄なる

蓮の実の飛んで波紋の先に鷺

鳥ごゑや紅葉且つ散る巫女溜り

手話の子の手のひらひらと菊花展

池に映る男の影の秋思かな

ひつそり閑黄落止まぬ神輿庫

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

類想句

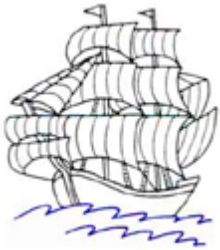
田中臥石

晩秋の岩牡蠣を食ぶ銚子港
潮枯のカンナ己を顧みる
諸を掘る土あたたかく匂ひけり
海の日の釣瓶落しや街点る
ふたたびの台風や猫膝へ寄る
許されよ一合の酒菊膾
萩括る亡き白陀師へ語りつつ
類想の句と思ひつつ木賊刈る
妻留守の即席拉麺秋茄子
衰へし目を慎めり暮れの秋

秋深し

松田泰子

十月の山野の急ぐ気配あり
秋澄むやナイフのごとき魚潜む
廃船に闇寄りやすく柳散る
倒れ木に椅りかかられて楢紅葉
赤まんま捨て自転車の濡れてをり
吹かれては楽しむさまやねこじやらし
小さき旅遠き眺めに秋の山
遠ざかる人ばかり見え秋の暮
歩まねば溺るる思ひ虫の闇
秋の蝶だんだんひくく見失ふ



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

鰯雲　石黒興平

秋日受け海のきらめくひとところ
句帳手の一団去りぬ彼岸花
木の実落つ鍵の錆びたる農具小屋
推敲の一字に迷ふ夜長かな
父逝きし日も広ごれり鰯雲
十六夜に濡るる家路や石畳
台風の先触れの雨街昏し

菊膾　岡田史女

落鮎や日照雨の走る峡の裾
音立てて雨の過ぎゆく菊膾
山水の湖へ落ちあふ蓼の花
木犀や即身仏のある寺に
栃の実のこつんと肩を叩きけり
畦道の乾ききつたり赤のまま
転職の子のこぼしゆく草虱

秋澄む　岡野里子

川底の砂紋明かや秋澄めり
池澄むや小鷺のせる己が影
軋ませて雨月の重き戸を繰りぬ
葉の蔭の残んの色や葛の花
満月の森を離れぬ遠鴉声
雨後の延べ段に散り萩白し
路地咲きの黄菊白菊西鶴忌

稲の秋

加藤静江

踏みかへて又叩きけりけらつつき
爽涼や日の出の青き八ヶ岳
諏訪富士へ芒穂を解く早さかな
深ぶかと稔り尽くしぬ稲の秋
夕照や稲の香満つる甲斐盆地
出そろひし穂に風生るる芒原
横向きの子規の肖像青ふくべ

流灯会

菅野日出子

隣席の白檀の香や風の色
名ばかりの平城跡やしだれ萩
一瞬に変はる風紋雁渡し
流灯のひしめき合へり細小川
奥の院までは胸突き鵙高音
古民家の裏木戸重し花八手
女生徒の行き交ふ山手小鳥来る

鵙日和

堺昌子

刈り頃の稲重さうに軽さうに
蔀戸の開け放たれて鵙日和
ふる里の蔵の記憶や鶏頭花
満月や今宵の幸をひとりごち
我が影のすらりと長し秋夕焼
先駆けのぬるで紅葉や池静か
我が足を恃む山坂小鳥来る

秋の山

中野久雄

手招きに棹さす渡舟秋うらら
地虫鳴く跡形も無き出城跡
彩りて朝日に映ゆる秋の山
小鳥来る日の斑を撒ける森の朝
花野行き消えては浮かぶ詩のかけら
そぞろ寒波音高き風岬
荒磯に砕くる波や雁渡し

青炎集

小川玉泉選

横浜　加瀬伸子

火襷の壺に投げ入れ唐辛子
平石の参道濡らし萩の雨
菩提寺の池の白蓮実を飛ばし
叢咲きて衣まとはぬ曼珠沙華
ひんがしの片雲解けぬ十三夜
園丁の松の手入れや六義園

横浜　大内由紀

颱風や天気予報に首つたけ
ことごとく色極むるや実紫
花蕎麦や出雲も奥の山の畑
ほとばしる終の紅濃く秋薔薇
富士のぞむ坂の芒や夕茜
さざめきて椋鳥の塒の大欅

横浜　横路尚子

花野行く親子の数ふひつじ雲
峠越ゆ広ごる畑の蕎麦の花
虫の音や語らひ尽きぬ山の宿
木犀の香の導けり堂の裏
金色の稲穂に群るる雀どち
公園の木の葉散り敷く台風過

横浜　榊山智惠

無患子の青き実拾ふ寺苑かな
発心の早朝散歩葛の花
緑鳩(あお)の緑の腹や秋高し
湘南の風に誘はれ月の客
一瀑や秘境川根の秋深く
三塔や靴に触れたる銀杏の実

横浜　小倉　純

秋天へ鋏の音の弾みをり
つくつくし秋の日となる鳴き納め
秋麗切るる鎌なきシニア会
秋の蟬めつきりへりぬ昨日今日
去年植ゑの花楽しめり酔芙蓉
古民家のへつつい三つ昼の虫

栗原　千葉惠美子

台風に備へ白萩括りけり
草虱遊び疲れし子が帰る
山下る手に四五本の吾亦紅
子供等に山栗貰ひまづ供ふ
新米を仏に供へ恙なし
バスの中熊出没の話など

横浜　福永幸子

恙なき日日夕暮の白木槿
雨粒の残る下草飛蝗とぶ
月代に黒松しかと立ちてをり
縺れあひ水引の花盛りなり
総代の神の鈴替ふ竹の春
それぞれの子に見合ふ丈草の花

横浜　立野千鶴子

小鳥来るあわてて眼鏡探しをり
秋天にかざして拭ふ眼鏡かな
一枚の空を斜めに鳥渡る
老いらくの歩幅となりぬ草紅葉
指先の衰へかばひ梨を剥く
楽土には友人多し十三夜

横浜　岩崎スミ子

秋の日や本堂工事今半ば
大寺の静かに始む冬支度
浅草の雀歩道に秋の昼
木犀の隅田の風に綻びぬ
こととと踊りはじめぬ鍋の栗
町川の急に騒がし下り鮎

横浜　久保田優子

墓石に弟の名や秋彼岸
落鮎の鰭より焼かれ香り立つ
家苞や先づは仏にあけびの実
亡き夫の手掛けし木槿高だかと
早起きの庭に一際曼珠沙華
晩秋や昭和を語るクラス会

耕土集

曼珠沙華かつて一揆のありし村　新潟　太田チヱ子
聡明な人は静かに吾亦紅
石臼を零れみどりの新蕎麦粉
寂びれ行く旧街道や柿明り
曼珠沙華中越地震拾年目

新たなる思ひ抱きて花野ゆく　横浜　吉田美智子
白雲や翅をたたみて秋の蝶
踏み入るや花野の花になりたしと
月山の視界を過ぐる秋茜
野菊咲く老人ホーム笑ひ声

鈴虫や廊下の奥の深き闇　川崎　滋野　暁
離れても著き香りや金木犀
雨上がり清清しくも後の月
門前の柿百円の値をつけて
香しき安達太良山の林檎かな

松本三千夫選

下山告ぐる電話に安堵秋の暮　横浜　小林　和世
秋冷や闇に手操れる小夜布団
秋の駅今日一日のエトランゼ
鵯の声に手を止む針仕事
野分中羊の数をかぞへをり

流れくる江差追分鰯雲　大網白里　上家　正勝
稲刈の轍に深き水溜
稲刈の風香ばしや夕日影
台風の前の穏やか日の光
夕月や嵐のあとの水鏡

自販機の煌々として虫しぐれ　横浜　加藤　タミ
吾亦紅行器（ほかい）を供に奈良の旅
カーテンをゆらす窓辺や秋桜
軒下を通る江ノ電彼岸花